

# 被災地の看護師・介護士たち

全国訪問看護事業協会事務局次長／健和会・看護介護政策研究所所長

宮崎 和加子

## 東北・北海道の

## 訪問看護ステーションの集まり

訪問看護ステーションは全国に約6000カ所あります。都道府県ごとに『訪問看護ステーション協議会』を作り、横の連携を持ちながら交流・サービスの質の向上のための活動を実施しています。

東北地方は7年前から毎年、各県のステーション協議会の交流会を持ち回りで実施してきました。昨春秋は、宮城県の松島で北海道の方も参加して盛大に行われました。勉強会も企画されましたが、泊り込みの宴会での県別の出し物が実にすばらしい！私は講演の依頼を受け参加させていただいたのですが、その勢いに圧倒されて

みなさんと心から親しくさせていただいたのでした。

## 顔見知りの関係での励ましあい

それから5カ月、あの大震災です。

「宮城のAさんはどうなった？命は助かった？」「岩手のBさんの事務所が津波で流されたんだって……。どうしてる？大丈夫？」「福島のみんなはどうしてる？」「原発の近くのステーションのCさんは？」などという会話が飛び交いました。

その後も、知り合いになり顔が重なった訪問看護ステーション同士が県を越えて心配しあい、励ましあってきたのです。日頃のつ

ながりがどれだけ大事かがよくわかりました。

## 今年は秋田県での集まり

今年の交流会については「大震災があつたので中止にしようか」という提案もありましたが、「こういうときだからこそ、やろうよ」という誰かの一声で、予定通り今年秋田県の方が中心になり企画されました。

参加者が少ないのではと心配したのですが、なんと昨年をはるかに上回る136名が集まりました。岩手県は昨年は13名でしたが、今年は被災した訪問看護ステーションからも多数参加し49名にのぼったそうです。



紅葉に染まる角館。わらび座のお芝居を見て、再度呼んでいただいた私の話があり、その後、待ちに待った宴会。準備された出し物が勢ぞろいで、昨年よりパワーアップ！

宴会のはじめに、被災した3県から大震災についての報告がありました。

その中で、宮城県気仙沼市にある『南三陸訪問看護ステーション』（社会福祉法人キングスガーデン宮城）の遠藤恵子所長の報告が鮮明に記憶に残りました。

以下、遠藤さんに許可をいただき、そのときの発表内容をそのまま掲載します。

### 南三陸訪問看護ステーション（気仙沼）のその時……

気仙沼にあります南三陸訪問看護ステーションの所長の遠藤といいます。

私たちのステーションは津波ですっかり流されてしまいました。カルテ1つ残っていません。車も家用車8台と、営業車6台中5台が流されました。

地震の時、私たちスタッフはみんな訪問中でした。

私も大谷海岸の近くの家に訪問していました。揺れが大きく、利用者さんと娘さんと3人で外に出て手をつないでしゃがんで、揺れが落ち着くのを待ちました。

その間、次々とスタッフから「この後どうしたらいいか？」とか「次の訪問どうしますか？」などのメールが入り、「すぐ訪問中止、ステーションに戻ろう」と返信メールを打ちました。

これが大きな間違いだったと後になって気づくのですが、その時はマニュアル通り「何かあったらステーション集合。津波に備え下の物を上あげて、心配な利用者さんの安否確認を手分けしてやろう」くらいに思っていました。

私もすぐステーションに戻るため娘さんに「後はお願ひね」と言っ

て車で帰ろうとしました。でも途中、橋を渡ろうとした時に、真つ黒な水が欄干を超えて勢いよく噴き上げてきました。びっくりしてすぐそばのコンビニの駐車場に入り、そのまま何とか上に

逃げる事が出来ました。

あと5分早く橋を渡っていたら、渋滞に巻き込まれそのまま流されていたらと思うます。そこは沢山の車が流された場所なんです。そしてまた5分遅く出ていたら、そこそ帰ってきた道が海岸沿いで道路を越えて津波が来たところだったので、やはり車ごと流されていたらと思うます。奇跡的に偶然に助かったんだと思っ

ています。

私以外のスタッフはというと、みんなそれぞれの訪問先からステーションに戻りましたが、「大津波が来る、高台に逃げる」と防災無線が叫んでいたとのことで、急いで200mくらい走って高台にある市民会館まで逃げたそうです。もう水が町に入ってきてザーザーという水の音が聞こえ、逃げながら振り向くと津波が入ってくるのが見えたそうです。

危機一髪でみんな何とか助かりました。夜は寒くて新聞紙やゴミ袋を身体に巻きつけながら、次々に運ばれてくる被災者の救護にあ

たつたそうです。3人の家が津波

や火事で無くなりました。でもみんな命だけは助かりました。私がステーションに戻ろうと指示を出したばかりに、みんなを非常に危険な目に遭わせてしまった。みんなが亡くなくても不思議でない状況だったと後でわかり、ぞつとしました。本当にそんなことがあったら私はもう仕事を続けていられなかっただろうし、それ以上に生きていられなかったと思います。

こんな大震災を経験し、私たちは「災害時マニュアル」の見直しを行いました。

今までは、連絡網で法人本部から私に連絡が入り、私からスタッフ全員に指示を出す仕組みでしたが、それを変更しました。

各自が自分の考えで安全を確保する、そして少し落ち着いたら状況を私に連絡する、ということになりました。また、利用者さんに地震津波の対応についてのお願ひの文書を出すことにしました。

●津波注意報や警報が出たら、解除されるまで訪問を一時中止しま

す。

●訪問中のときは、利用者さんの安全確保に努力し、私たちもすぐ安全な所に避難します。

●電話が通じなくなることもありませんが、その旨をあらかじめご了承ください。

そういう内容です。そういう文書があると、スタッフがすぐ逃げることも含めて行動しやすいということです。気持ちも楽になるといので、出すことにしました。

今では津波がきたら危ないという地域の家は流されてなくなり、



ステーションのスタッフ。左から2人目が遠藤さん。

残ったのは山の方とか高台の方です。

また危険なのは移動中の道路です。今も被災した道路を通って訪問しており、「ここで津波がきたらどこに逃げたらいいんだろう」と、いつも考えながら運転しています。

それから、震災後、利用者さん

津波で流されたり、助かってもライフラインが途絶え全身状態が悪化して亡くなったりと、関連死を含め約30名の方が亡くなりました。また転居や施設入所を含めると約50名、4割の利用者さんがいなくなり、収入は6割減りました。

早く元に戻したいと、今思えばずいぶん焦っていたように思いますが、でもなかなか思うようにはいかないもので、事務所もまだ決まっていません（現在は同じ法人の特養の一角を借りています）。収入も伸びません。ようやく震災前の7割くらいになってきたところですが、すっかり元に戻るのには、気仙沼の漁業や街の復旧・復興と

同じで何年もかかりそうです。

私の今の目標は新しい事務所に移り、「南三陸訪問看護ステーション」という看板の前でスタッフみんな写真撮って、その写真にお菓子の一つも添えて支援して下さった方々に「あの節はお世話になりました」というお便りを出せるようになることです。

その日を目指して焦らず、でも着実に頑張っていきたいと思っています。



4月に筆者が訪問した時の様子。

## 《新刊》

# 病院退院計画から地域ケアへの展開に向けて

— 医療と福祉をつなぐソーシャルワークの役割 —

日本社会事業大学専門職大学院准教授 木戸宜子 著

(ブックレット・シリーズ「日本社会事業大学専門社会福祉士講座」⑨)

平成23年12月発行／定価：840円（本体800円＋税）

本書は、病院のソーシャルワーカーとしての10年の経験を踏まえて、退院支援における課題やソーシャルワーカーの役割を論じたもの。実践例として脳卒中リハビリテーション等における退院支援の取り組みを紹介。地域ケアを展望し、具体的な取り組み方も説明。ソーシャルワーカー・関係者に。

〈発行 社会保険研究所〉